

日本語の複数標識に見られる英語の影響 -「-たち」が表象する個別化の観点から-

村端 佳子

要約

第二言語習得における最近の研究では、言語的マルチコンピテンスの観点からどのように複数言語が個人の頭の中で作用し合い、第二言語使用者はいかに単一言語使用者と異なるのかが探られており、その証左が多く報告されている。本研究では、とくに日本語の複数標識である「-たち」の使い方の例を挙げ、個人的なレベルではなく社会的なレベルにおける言語的マルチコンピテンスを探る。

英語では可算・不可算名詞を区別し、生物・無生物に関係なく数えられる物が二つ以上ある時には必ず複数形にする。一方、日本語では人間と一部の動物にのみ随意的に「-たち」をつけることがあっても、無生物につけることはない。ところが最近の日本語では、本来は容認可能とされない無生物名詞に「-たち」をつけた「本たち」のような使い方を頻繁に見かけるようになった。また人や動物にも多用されるようになってきている。興味深いことに、たとえば一般的な複数を表す「サル」と個別化された複数の「サルたち」が使い分けられている。このような複数形の用法は、狩猟の獲物や食料を表す *deer/deers* などの英語の名詞にも見られ、*deers* のような複数形を用いる時は、その動物の個別化をしているときであるという。すなわち、複数があるということは単数があるということであり、単数と複数の区別をすることは、認知的には個別化を意味するのである。

現在使用されている日本語の「-たち」の複数形の用例と、英語の単数形・複数形の使い方の用例を比較し、複数形の認知的なプロセスを論じた上で、本論では日本語における「-たち」の多用が英語の学習や習得の影響であり、日本社会における言語的マルチコンピテンスとみなしても良いのではないかと提議する。

キーワード：言語的マルチコンピテンス、日本語の複数形、日本語に見られる英語の影響、複数標識としての「-たち」の使い方

1. はじめに

近年、日本語の名詞や代名詞の接尾辞として用いられる「-たち」が多用されるようになってきている。しかも「本たち」のように、本来は動物・人間につける「-たち」を、非文法的とされる無生物名詞にまで使用する例を多く見かけるようになってきている。本論では、それが少なからず英語の影響を受けたものであることを、実際の使用例を示して考察する。

日本語では一般的に複数を表す場合、「私たち」「学生たち」のように名詞の後に「-たち」¹を必要に応じてつけることが可能であるが、無生物の名詞を複数形にすることはなく、「本たち」「机たち」という複数形は通常は作らないとされている (Corbet, 2000)。ところが、近年テレビの放送で「細胞たち」(NHK、「ためしてガッテン」2016, 1, 20)²、「車たち」(宮崎放送、マツダのコマーシャル、2016, 1, 11)、「革たち」(宮崎放送、「めざましテレビ」2016, 6, 13)、などのように無生物名詞に「-たち」をつける用法を多く耳にするようになった。また「多くの若者たち」(NHK、「おはようこうち」、

2016, 6, 20)、「黒島の牛たち」(NHK、「アサタビ」、2016, 6, 26) などのように、「-たち」の使用が頻繁になってきている。そこで、そのような名詞の複数化は日本語話者が英語学習を続けた結果、母語である日本語に影響を与えたのではないかと問題提起をし、複数形を使うことや複数形を持つことの認知的意味をもとに、言語変化の観点からその根拠を論ずる。

2. 英語と日本語における名詞の複数形

(1) 一般的な比較

形態論の観点から名詞をみると、まず、英語は可算名詞と不可算名詞を区別し、二つ以上のものを表す場合は常に複数形にする必要がある (book/books, dog/dogs, child/children など)。不可算名詞の量を表す時には通常 classifier (分類詞) と呼ばれる数量詞を用い、数量詞を複数形にすることで量を表す (a cup of coffee/two cups of coffee など)。一方日本語は数という文法範疇を持たないとされ (池上、2007; 加藤、2006)、可算名詞と不可算名詞を区別しない。さらに、名詞の複数形は厳密ではないため、たとえば「公園で子供が遊んでいる」という表現は、遊んでいる子供が一人かそれ以上かは不明であるが、日本語として問題はない。複数を表す時には「-たち」や「-ら」「-ども」をつけて「子供たち」「子供ら」「私ども」と表すことも可能ではあるが³、かならずしも義務的ではなく必要に応じて付されるのである (Corbet, 2000)。

(2) 無生物名詞の複数形

さらに、英語では可算名詞は生物・無生物の区別なく、同様に扱われるため生物でも無生物でも、2つ以上ある場合は複数形にする必要がある (boys/dogs/desks など)。一方、日本語では人間と一部の生物に「-たち」を加えて複数を表す場合はあっても、無生物を複数形にすることはなく、特に Corbet (2000)はそれを「不可」であるとしている。

日本語の辞書を見ると「-たち」は古くは複数とともに尊敬の意味も表していたようで、とくに上代 (8世紀、奈良時代)には、神・天皇・高貴な人に限って用いられた (松村、2012)。しかし、一般的には「名詞・代名詞について複数形を作る接尾辞」であり (新村、2018)、中には「人を表す名詞・代名詞につく」接尾辞であるとか (松村、2012)、「人間・動物などの」複数を示す言葉であるとしている辞書が多い (見坊他、2014; 西尾・岩淵・水谷、2009)。すなわち「-たち」は、「私たち」「学生たち」などのように人間の名詞・代名詞と「犬たち」「鳥たち」のように一部の動物には使うことができる。このように「-たち」を動物に使うということを「擬人化」とであると記述している辞書もある (林、1986; 三省堂編修所、1985)。元来は高貴な人たちだけに使われていたが、使用範囲を広げて一般の人たちにも使うようになり、さらに「擬人化」として動物にも使われるようになるまで使用域が広がったのである。

その使用域がさらに広がって、最近の辞書の中には「人・生物以外にも使うこともある」として「思い出をさそう古い机たち」という例文がみられる (西尾・岩淵・水谷、2009, p. 900)。本論では、まさにこのような無生物の名詞に「-たち」がついた複数形の用法について論じていく。

(3) 日本語名詞の数

Murahata and Murahata (2017)は、日本語の「名詞+たち」の表現に関する調査を行なった。複数の場合でも日本語の名詞に「-たち」をつけない表現が自然な日本語と受け取られるかどうか、さらに、生物名詞と無生物名詞に「-たち」をつけた表現が自然な日本語であると感じられるかどうか、そ

の容認可能性を判断するという課題を用いた調査研究である。その結果、一般的な日本語名詞表現の記述にあるように、やはり「3人の警官」「3台のパソコン」などのように、「警官」「パソコン」という名詞を複数形にしなくても自然な日本語表現であると判断する度合いは非常に高く、日本語における名詞の複数化は厳密ではない、ということが確認された。また、「-たち」の使用に関しては、「猫たち」のように生物に「-たち」がついた場合の方が、「本たち」のように無生物に「-たち」をつける場合よりは容認度は高かった。日本語の「-たち」の使用に、有生性は重要な指標であると思われる。

同研究でさらに「壁にたくさんの写真たちがかけてある」という表現をどのように受け取るか、記述式回答で調査したところ、英語能力の低いグループは「数が多いことを強調している」とか「日本語としては変だ」などの記述が多く、英語の能力が高いグループの方が「比喩」あるいは「擬人化」の用法として受け取る割合が高いという結果を得た。「比喩」であると受け取るということは、無生物のモノを生き物のように扱っているということで、写真がただの「モノ」ではなく「大切なもの」「特別なもの」「思い入れがある」という印象を受ける、との記述が多かったのである。中には「ひとつひとつに重点が置かれている」との記述もみられた。日本語には数の区別はないために、英語の数は多くの注意を要し常に意識しなくてはならない側面である。英語学習の過程で単数・複数の区別をしななければならない、という数への感覚が日本語における複数形にも応用され、擬人化の効果がより認識されたのではないかと結論づけている。

(4) 認知言語学での複数の捉え方

そもそも複数形を有するというのはどういうことであろうか。複数形があるということは、前提に単数形があるということになる。単数と複数とを区別するという事は、数えることができるということであり、それが属する種類に属する個別化された個体であることを意味する。たとえば「机」というカテゴリーに属するひとつの「机」が存在するということになる。一方、「水」は、不可算名詞というその名称の通り数えることができない。任意の量を取り出して個別の容器に入れることは可能ではあるが、一部に境界線を設けて「机」のように個別化し個体として扱うことはできない (Huddleston & Pullum, 2002; Lee, 2001)。

日本語ではこのような単数・複数の区別をしないので、たとえば「公園で子供が遊んでいる」という表現はまったく問題がないのである。ところが「公園で子供が遊んでいる」を英訳する場合を考えると、この日本語は曖昧となり、以下のように (1) なのか (2) なのか確認する必要がある。

- (1) There is a child playing in the park.
- (2) There are some children playing in the park.

このような場合はまだ良い。次のような (3) (4) の場合は、日本語話者にとっては厄介である。

- (3) 昨日は鮭を釣ったよ。
- (4) 夕食は鮭にしよう。

すなわち、魚を釣りに行って「鮭を釣った」となると、英語で言えば可算名詞の「鮭」であろう。夕食の食材として「鮭」を食べるとなると、不可算名詞となり「鮭の身」を表す無冠詞の salmon を使う。A salmon とすると、鮭を一匹食べることになってしまう。そこで以下のようになる。

- (5) I caught a salmon yesterday.
- (6) Let's have salmon for dinner.

すなわち (5) では個別化された鮭を指し、(6) では個別化されていない鮭を指している。日本語話者

が英語を使用する場合には、普段日本語を使用している時とは異なり、このように常に個別化が可能なモノであるか、そうでない物質かを常に意識する必要があるということだ。日本語を使用するときとは異なる認知活動をしていると言ってもよいであろう。

(5) 英語の複数形のあいまいさ

英語には可算名詞・不可算名詞があり、個別化が可能なモノを表す名詞とそうでない物質を表す名詞を明確に区別しているように思われるが実はそうではない。上に挙げたように *salmon* は可算名詞として使われることもあれば、不可算名詞として使われることもある。次の (7)(8) を見ると、*tea* は物質名詞で数えられないので、一般的には (7) のように無冠詞、単数形で使われるが、「一杯の紅茶」になると普通名詞のように扱われて複数形になることもある。*Wine* も (9) のように通常は不可算名詞だが、種類を表す時には (10) のように複数形にして種類を表すことが可能だ。

- (7) I always have tea after lunch.
- (8) Two teas, please.
- (9) I hear red wine is good for health.
- (10) We tasted fine Japanese wines last night.

すなわち、複数形にした場合は個々の「カップに入った一杯の紅茶」「ひとつひとつのワインの種類」が表されていることがわかる。繰り返すが、複数形があるということは「個」があるということである。

英語には単複同型と呼ばれる名詞があり、主として *deer*、*fish*、*sheep* など食料になったり、狩猟の目標となったりする動物が多い (Lee, 2001)。ところが興味深いことに、つぎのように *deer* と *deers* の両方が使い分けられる場合があるという (Reid, 1991)。

- (11) Did you get any deer?
- (12) Do you go to a place where the deers go by?
- (13) I looked out and saw seven or eight deer standing out in the field. As I looked at the deers I thought about how nice it was they were safe on our land. (p. 130)

(11)は漁師に対する問いかけで、獲物としての *deer* を意味している。ところが (12) になると狩猟の獲物ではなく、複数形にすることで、より個別化されて一頭一頭の鹿をイメージしていることが伺える。(13)では最初の *deer* は「7、8頭の鹿」と言っているので複数の鹿を指し、通常の単複同型の名詞である。それが、次の箇所では *deers* と複数形になっている。これは一頭一頭の鹿を意識し、複数形にすることで自分の土地に入って来た鹿への共感が感じられる用法であるという。

このように本来は複数形にしない *deer* を複数形にすることで、「自分の土地に入って来た鹿」への共感を示す、という用法は単なる「擬人化」ではなく「個別化」という概念を通じてなされているようだ。鹿を獲物と見なせば、個別化は不要である。獲物としての鹿は個性を持った一頭一頭異なる鹿ではなく、ただの鹿に過ぎない。この鹿とあの鹿は別々の属性を備えた個性のある鹿であると見なし何らかの心理的共感を覚えると、狩猟の獲物として見做すことが難しくなってしまうであろう。

Webster の辞書にも *bear*、*duck*、*fox*、*lobster*、*rabbit*、*tuna* など 34 種類の動物・海の生物の名前が並び、それらには単数形・複数形の両方があるが、狩をしたり、釣りをしたりする人たちには *s* のつかない単数形の方が好まれる、という記述がみられる (Gove, 1993)。一方、クマやキツネ、エビやマグロを一頭一頭、あるいは一匹一匹を個別化することは、そもそも視覚的に非常に難しい。これ

らのものは個体の特徴が一般的には明確ではないからである。毎日世話をしている動物園の飼育係とか、生態を研究している研究者、つまり自分の範疇に属しているものとしての共感を感じる場合には、個体の識別が可能かもしれない。

とすれば、Murahata and Murahata (2017) にみられた、「写真たち」という無生物名詞の複数形を使うことによってそれが「大切な写真」「思い入れがある写真」という感情を表す修辞技法は、単に写真を人のように扱うという擬人法ではなく、このような複数形による「個別化」の用法なのではあるまいか。複数形にするということは個別化するということにつながるからである（荒木、1984）。では次に、近年みられる「たち」の使い方を、テレビ番組から取り上げて見る。

3. 「-たち」がついた名詞

(1) テレビで使われた名詞+「-たち」

2015年12月1日から現在まで、テレビで使われた「-たち」のついた名詞を、無作為に集め、次の3つに分類した。まず、日本語では一般的に非文法的と見なされる(1)「無生物名詞+たち」の用法、さらに一般的に文法的には容認可能だが選択的に行われる、(2)「動物などの生き物+たち」の用法、と(3)「人間+たち」の用法、の3つである。まず、それぞれどのような名詞に「たち」がつけられているのか、3つのグループの例を見てみよう。各グループで10件の例を放送の古い順に挙げてみる。

(1) 「無生物名詞+たち」の例

- ① 家に眠っている箱たち (NHKG、「すてきにハンドメイド」、2015.10.27)
- ② 焼き物たち (NHK、「BS プレミアム」、2015.12.1)
- ③ おかずたち (NHKG、「サラメシ」、2015.11.9)
- ④ 細胞たち (NHK、「ためしてガッテン」、2016.1.20)
- ⑤ お弁当たち (NHKG、「サラメシ」、2016.2.1)
- ⑥ 野菜たち (NHKBS1、「アジア食紀行」、2016.3.30)
- ⑦ 薬味たち (NHK、「プロフェッショナル・仕事の流儀」、2016.4.11)
- ⑧ このカスたち (NHK、「あさいち」、2016.5.25) 【フライパンを煮沸して表面をつるつるにする裏技の実験中、表面についたカスが浮いてくる映像の解説】
- ⑨ 胸キュンで使われたミュージックたち (高知さんさんテレビ、「痛快テレビスカッとジャパン」、2017.7.3)
- ⑩ 石のアーチたち (NHK、「体感！グレートネイチャー 発見！カッパドキア誕生の秘密」、2018.5.11)

(このほかに見られた例：「車たち」「トマトたち」「リンゴたち」「アメリカンなお店たち」「高級魚たち」「星たち」「家具たち」「石たち」「名曲たち」など)

(2) 「動物などの生き物+たち」の例

- ① 巣の材料を探す親鳥たち (NHKBS「プレミアム」、2016.4.5)
- ② 魚たち、桜えびたち (NHK、「ひるブラ」、2016.5.11)

- ③ 空港に集まった犬たち (NHK、「ニュース watch9」、2016.5.20)
- ④ 町中を歩く鹿たち (NHK、「歴史秘話ヒストリー」、2016.5.22)
- ⑤ のびのびと育つ黒島の牛たち (NHK、「あさたび」、2016.6.26)
- ⑥ 生き物たち (NHK、「さわやか自然百景」、2016.1.24)
- ⑦ 虫たちをつぎつぎと引き寄せる (NHK、NHK スペシャル「クニ子おばばと不思議の森」、2016.3.6)
- ⑧ ライオンたち (NHK、「ダーウィンがきた」、2016.6.12)
- ⑨ いとも簡単に獲物を捕るサメたち (NHK、「ダーウィンがきた」、2017.1.29)
- ⑩ サルたちが島の外へ行くおそれがあるとして (NHK 宮崎、「夕方のニュース」、2017.3.13)

(このほかに見られた例:「シャチたち」「マグロたち」「猫たち」「カワウソたち」「クワガタたち」「(クワガタの)メスたち」「珍獣たち」「羊たち」など)

(3) 「人間+たち」の例

- ① 農家たち (NHKG、「すてきにハンドメイド」、2015.10.27)
- ② アンカーたち (NHK、「箱根駅伝」、2016.1.2)
- ③ 家族たち (NHK、「クローズアップ現代」、2016.1.19)
- ④ 会場に集まる女性たち (NHK、「日曜スペシャル」、2016.1.31)
- ⑤ 一人でも多くのランナーたちにここを通過してもらいたい (BS-TBS、「北九州マラソン」、2016.2.21)
- ⑥ 忙しい親たちを助ける (テレビ宮崎、「スーパーニュース」、2016.3.1)
- ⑦ 大勢の人たちが祝福しました (NHK、「ニュース7」、2016.3.5)
- ⑧ 島を離れるのは7人の先生たち (MRT、「ニュース NEXT」、2016.3.30)
- ⑨ 難民たちを乗せた船 (NHK、「おはよう日本」、2016.4.21)
- ⑩ 農業大学校に集まる多くの若者たち (NHK、「おはよう高知」、2016.6.20)

(このほかに見られた例「愛好家たち」「アナウンサーたち」「キャスターたち」「スパイたち」「学生たち」「メンバーたち」「ママたち」「男性のコーチたち」「通勤者たち」「旅行客たち」「家族たち」「巨匠たち」「男たち」「探偵たち」「私の先祖たち」「ご先祖さまたち」「高校生たち」「教師たち」「警察官たち」「幹部たち」「乗客たち」「中学生たち」「受験生たち」「難民たち」「アジアの強豪たち」「日本人たち」「遺族たち」「アーティストたち」など)

(1) の「無生物名詞+たち」の例を見ると、身近なものだけでなくフライパンのカスや、石のアーチにまで「-たち」がつけられている。(2) に関しても、「大切なもの」「共感をしめすもの」に付与されるのだとしても、その範囲はとくに身近で共感を感じやすいような生物に特定されているようにはみられない。昆虫から牛やライオン、サルに至るまでいろいろな生き物に「-たち」がつけられている。(3) における人間もさまざまである。やはり、人間につけられた「-たち」の例が圧倒的に多い。そして、上にあげた例は、(1) に挙げられた例はもちろんのこと (2) と (3)

の例も、今までの標準的な日本語の用法からすればあえて「-たち」をつけなくても良いものである。たとえば(3)の⑤は「一人でも多くのランナーにここを通過してもらいたい」、⑥は「忙しい親を助ける」、⑦は「大勢の人が祝福しました」、という具合に、「-たち」をつけなくても良いはずであるし、つけなくても日本語としては誤りではない。では、なぜ「-たち」をつけるのか。使用例をもう少し詳しく分析する。

(2) 「たち」の使い分け

これらの「たち」の使い方をよく聞いてみると、常に「-たち」をつけているのではなく、かといってランダムに用いているわけでもなく、使い方の区別が感じられる。すなわち、個別化が必要な時に「たち」をつけて複数形にし、その必要がなく種一般をいう時には「-たち」をつけていない。たとえば、以下は「サル」についてのニュースで、その原稿がインターネット上に載っていたものである。このサルは芋を水で洗って食べる習性を確認されたサルで、現在およそ100匹ほどが、宮崎県串間市沖の幸島に生息している。

野生のニホンザルが生息する串間市の幸島の周辺で、先月から潮が大きく引いた際に島と陸地の間に「砂の道」ができるようになり、市は、サルたちが島の外へ行くおそれがあるとして、サルの離島を防ぐため監視員を配置することを決めました（下線は筆者）。（NHK 宮崎、2017.3.13）

最初の「ニホンザル」は不特定の種一般を示しており、個別化する必要がない。2番目に出てくる「サル」にだけ「たち」がついており、この「サルたち」というのは、「幸島に住んでいるサル」という貴重で大切な一匹一匹のサルを念頭においたため、このような表現になったと思われる。3番目のサルは「幸島に代々住みついて生息するようになった動物としてのサルで、その猿には芋を水で洗って食べる習性がある」という個体群であり、その全体を示す不特定のサルであると解釈できる。

さらに「ポスターたち」と「ポスター」の使い分けが次の小説からの抜粋に見られる。

右を向けば、「第〇回高校生全国弁論大会出場者募集！」。左を向けば、「姉妹校・アメリカ、コロラド州の大学に進学しませんか【限定一名、選抜試験あり】」。職員室の壁には、どう考えてもぼくたちには縁のないポスターたちが貼られている。限定一名なんて、しかも選抜試験ありだなんて、「隆也が受からない」に百万円だってかけてもいい。そんな知的なポスターに囲まれて、高田が大きな図体をしゅんと萎ませている（下線は筆者）。（朝井、2012、p. 125）

最初の「縁のないポスターたち」では、複数形になっていることで様々なポスターが壁に貼ってあり、一枚一枚が際立って主張しているような様子が伺える。次に出て来る「ポスター」は「知的」であると描写されており、それらを一括りにまとめて「ポスター」になっている。つまり個別化が必要な場合に「-たち」がつけられており、その必要がないときには従来通りの「-たち」がない名詞形なのである。では、どうしてこのように本来日本語では容認され難い「無生物+たち」という用法、あ

るいは使う必要がないと思われていた「生物+たち」を多用するようになり、それによって「個別化」を表現するようになったのだろうか。言語変化について考えてみる。

4. 言語変化について

(1) 言語の変容

何が言語を変化させるのか、という疑問に対してパイビー(2019)は次のように述べている。

何が言語を変化させるのだろうか。非常に一般的な答え方は、我々の言語の語や構文は我々の心・脳 (minds) と身体を巡り、ある話者から別の話者へと言語仕様 (usage) を通じて受け渡されていくにつれて変化する、というものだ。(p. 14)

すなわち、最初はある話者の工夫や閃きによって使われた用法が、徐々に広まり、社会全体で受け入れられるような用法になる、ということである。最初のごくわずかな人たちによって使われていた個別化を表す「-たち」の用法が、徐々に広まり、多くの人々によって使われるようになった、と考えられる。

では日本語で、一体誰がいつ頃無生物名詞を複数形にするような使い方を始めたのだろうか。筆者が知る限り、最も古い例は乾(1958/1974)が示している。乾は「国語の表現に及ぼした英語の影響」の中で、受動態、使役形、進行形、未来形、仮定法、などの英語の文法構造のみならず、前置詞や接続詞の日本語訳や、修辞・文体表現が多く英語の影響を受けていると述べて例を挙げている。その中で、名詞の複数化も英語の影響であるとして、擬人化を意図した次のような複数形が文学作品の中で使われているのを指摘している。

その別れの前夜、なつかしき愛書たちに、酒を一升さぐげ、愛唱歌を口吟しながら、一箸に一盞といったような割合で飲んだ。が、一升では、とても足りなかった。それがとても、うれしく、たうたう詩集たちの中へ、酔いつぶれてしまったのであった(下線は筆者)。(井東、1941、p. 36)

この場面は筆者である井東が、訳あって詩集を手放すことになった前夜のことを描写した箇所である。「愛書たち」「詩集たち」と複数形になっていることで、一冊一冊の本に対する筆者の気持ちが感じられる。またこの他にも、「-たち」ではないが「植物共」⁴や「着物ども」⁵のように「ども」を使ったり、梅の花の雄しべを指して「彼等」⁶と、複数形を使っている例を挙げている(乾、1958/1974)。これらはすべて1920年代から1940年代にかけて書かれたものであるから、無生物の複数形を用いた用法は約100年ほど前から見られた現象でのようである。そして、それは英語の影響を受けていると解釈されている。

それからずっと後に、NHKアナウンス室(2008)には日本語の「小鳥たち」「名車たち」のような複数形は、英語の影響を受けたものであろう、という記述がみられる。また作家・劇作家である井上ひさし氏は、大江健三郎氏が「書物たち」と初めて「無機物」に「-たち」をつけた、と述べてそのような技法を賞賛している(井上、2011)。井上はその用法に英語の影響を言及してはいないが、少なく

とも大江健三郎氏はノーベル文学賞の授賞式において英語でスピーチを行っているので、英語の上級使用者ということになる。

さらに Murahata and Murahata (2017)は、英語能力の高いグループは「-たち」をつけた用法を「比喩」や「擬人化」の用法として解釈するという結果を示し、彼らは認知的になんらかの英語の影響を受けているのではないかと考察している。牧野(2007)は認知的なアプローチによる分析で、対象物が心理的・物理的にウチの領分にある時、その対象物への共感を表すために「たち」を生物・無生物にかかわらず用いることができる、としている。ここで言及すべき点は、「生物・無生物にかかわらず用いる」という使用法は前述の Corbet (2000)の記述と全く反するところで、やはり日本語では近年「-たち」の用法に変化が見られる、といっても良いのではないか。その言語変化は何が原因なのだろうか。内的要因として日本語の内部にあるのか、それとも外的要因として英語という外国語との接触に原因があるのだろうか。次にこのような変化をもたらした要因について考える。

(2) 内的要因と外的要因

言語は音韻、語彙、統語などあらゆる面で、絶えず変化していると言って良い(バイビー、2019)。では「-たち」の使用が英語の影響かどうかを確認する際に考えるべきことは、英語の影響がなくてもそのような変化が起こり得たかどうか、である。一千年ほど前に、元来は神・天皇・高貴な人に限って用いられた「たち」が次第に一般の人に用いられるようになり、その使用は一部の生物にも広まった。その変化の過程を考えると、徐々に全ての名詞に「-たち」がつくようになった、という自然な内的変化の可能性がまったくないわけではない。

ところが、内的要因が全てであると言えない理由が三つの点である。まず、内的要因による言語変化は、通常は有標ではない方向に変化するからである(バイビー、2019)。日本語の「たち」がついた名詞は有標であろう。日本語の文法範疇には「数」がないといわれ(池上、2007)、そうであるとすれば、変化が起きるならば徐々に「たち」が使われなくなるという無標の方向に変化するはずである。第二の理由として、「たち」の汎化がすすみ、さらに「擬人化」の用法として使われるようになったとしても、一千年かけて変化してきた用法が、たかが100年の間にこのように急速に変化をするのは、なんらかの外的刺激があったと考えてもよいのではないだろうか。そして、三番目の理由として、上に見たように個別化を表すときと一般的な種類を表すときの「-たち」の使い分けは認知的な複数の概念が関わっていると考えられるため、元来複数形を持たない日本語の内的要因のみでは、認知的観点から説明が不十分となる。外的要因の英語があつてこそ、変化が現れたのではないか。

日本社会では日常的に英語が使われているわけではなく、英語は外国語として学校で学ばれる一教科にすぎない。明治以降、オランダ語や中国語に代わって英語が主たる外国語として学ばれるようになり、現在では全く英語を知らない完全なモノリンガルの日本人を見つけることが難しいほど英語が学ばれてきている。そのような社会で、およそ80年ほど前に井東憲氏がひとつひとつの書物や詩集への愛着を表現するために「愛書たち」「詩集たち」と表現し(井東、1941)、その後大江健三郎氏が「書物たち」を使ったことが指摘されている(井上、2011)。近年、無生物に「たち」をつけた形は出版物やネット上にも多く見られるようになってきた。たとえば本のタイトルに『遠い朝の本たち』、『万葉の植物たち』、『サルたちの遺言』⁷などが見られる。さらに「新しい英語たち」、「お部屋たち」、「私を許すものたち」、「魅力ある前置詞たち」、「使用頻度に引っぱられることばたち」⁸のように著作物の中で使われているものもみられる。また、博物館等の展示会のタイトルに「消えゆく植物たち」⁹、「海

を渡ってきた名品たち」¹⁰、「歴史を語る資料たち」¹¹のように使われているのを見ると、いかにも一点一点を選びすぐって展示をする思いが感じられる。

(3) 社会内でのパターン化

これらの「-たち」の使用は無論、言語規則を変化させようとしてそのような表現を用いているのではない。彼らは単に何かを伝えるために用いたのである。言語変化に関してバイビー（2019）は次のように述べている。

言語使用者はただコミュニケーションをとろうとしているだけであって、そのためにあらゆる手段を自由自在に使っているのだ。彼らは人間であるがゆえに、その認知や、社会的な意識や、目的も関わっている。それらが言語使用者間で共有されることで、同じような認知的・社会的プロセスが全言語の発話事態（usage event）で起こる。産出の圧力、語彙的・文法的な記憶へのアクセス、それらの記憶の生産的使用、そして意思伝達に必要な含意や推論などに影響を受けた発話事態が、共同体の中で蓄積されていく。その蓄積が、話者や状況を横断した強力な型（パターン）を作り上げる（p. 371）。

すなわちこの考えに沿って「-たち」の使い方をみていくと、最初は英語に触れた日本語話者が名詞の複数形を使うことによって「個別化」という概念を意識的か無意識的か身につけ、個人の大切なものに対する感情や共感を表すための修辭的効果を狙った無生物を複数化するという言語表現を生み出した、と考えられる。そして、それを目にした人や耳にした人がその用法を認識し、理解し、評価し、それを模倣して同様のやり方が繰り返して使用されることで、もはや個人のレベルに留まらず、社会に広まって来て次第に規則化してきているのである。

最後に付け加えておくべき事柄が一点ある。元来、日本語では人に使っていた「-たち」を無生物のモノに使うようになった現象として、それが「擬人化」と受け取られるか「個別化」と受け取られるか、の問題である。確かに「擬人化」として受け取られ、「写真たち」と表現することで、写真をまるで生きているものであるかのように大切に思っている、という解釈が可能である。動物につける「-たち」も同様に考えられる。ところが同時に「ランナーたち」「親たち」「大勢の人たち」のように人間にも多用されている非義語的な現象は、「擬人化」ではなく「個別化」を意図したものと解釈した方が合理的であろう。

(4) 言語変化の意義

最後に、このように日本語が変化して行くことを、日本語話者はどのように捉えるべきかという問題が残される。たとえば車の宣伝に使われた「車たち」のような使い方は、「宣伝効果」を考えた特殊な用法であると受け取られるかもしれない。が、3の(1)で挙げた「箱たち」や「おかずたち」のような日本語は、日本語としては受け入れられない、と考える人もいるのではないだろうか。同様に3の(2)(3)に見られた、「巣の材料を探す親鳥たち」「多くの若者たち」は従来通りの日本語表現の「親鳥」「若者」で十分ではないか、と受け取る人もいるであろう。

その一方で、「-たち」をつけた表現を、新しい日本語の用法であり、英語の影響で日本語が豊かになる、と受け取る人もいるであろう。ここで再度、井東（1941）の文を読んで、「-たち」がある文とない文を比較して頂きたい。

- なつかしき愛書たちに、酒を一升さゞげ、愛唱歌を口吟しながら、一箸に一盞といったような割合で飲んだ。
- なつかしき愛書に、酒を一升さゞげ、愛唱歌を口吟しながら、一箸に一盞といったような割合で飲んだ。

「-たち」がある文とない文では、やはり受け取る印象が違うのではないだろうか。また、この二つの文章を英語に翻訳する場合、違いを表現するには筆者である井東の詩集に対する気持ちを解釈して、言葉を付け加える必要があると思われる。であるとすれば、日本語に表されたこのような違いを享受できるのは日本語話者だけであり、その中でも、Murahata and Murahata (2017)の研究によれば、この比喩的な修辭法を適切に解釈できるのは英語能力の高い日本語話者ということになる。すなわち、日本語と英語の両言語の能力を兼ね備えた者こそが、この違いを享受できるという言語的マルチコンピテンスの考え方に行き着くことになる。

今後このような「-たち」の用法が、社会でどのように受け取られるのか、どのように広まって行くのか、さらに調査が必要であろう (Murahata, Murahata & Cook, 2016)。

4. おわりに

本稿では、まず英語と日本語の複数形を比較し、複数の概念が明確に現れる英語に対して日本語ではそれが曖昧であることを示した。が、実は英語においても本来は複数にならない名詞の複数形を示すこと、さらに狩猟の対象となる獲物や食料としての生物に単数形が好まれるかなどの状況を見ていくことで、英語における複数形の曖昧さを論じた。その上で無生物名詞に「-たち」を用いることで擬人化の用法であるという考え方に加えて、複数化は個別化の用法であることを実際の例を見ながら論じた。すなわち、生物である動物や人間に「-たち」を付加する場合に、個別の物を際立たせた時に複数形にし、一般的にそのカテゴリーに属するものとして言及する時には「-たち」がつけられていないのである。

さらに社会全体を見た時にこのような言語変化は、以下の理由から英語の影響を受けた用法であると思われる。まず、日本語内での変化であれば無標の方向に進むべきであるが、「-たち」をつけるのであれば、それは有標の方向に変化している。つまり、通常考えられる方向とは反対の方向へ変化しているのである。また、比較的短期間に変化したため、内部要因のみでは考えにくいと思われる。さらに、「個別化」の概念を表す用法であれば、元来複数の概念がない日本語だけでは、このような変化は起こらないのではないかと、という理由である。そのため外部刺激として、英語の影響が働いていると考えられる。

そしてさらに、最も古い「無生物名詞+たち」の例として井東 (1941) に現れる「愛書たち」「詩集たち」を取り上げ、その後「-たち」の使用が社会的に多く見られる現象であることを示して、英語の影響ではないか、と結論づけた。

このように「-たち」を効果的に使った接辞技法は英語の影響と思われるが、今後さらに社会全体の使い方を調査し、そのパターンを観察していく必要があると思われる。また、英語の影響でより豊かな表現方法が備わったと考える人もいれば、元来の日本語の規則に逸脱していると考え否定的に見る

人もいるかもしれない。このような使い方を日本人自身がどのように受け止めているかの考察も必要であろう。

注

- ¹ 「-たち」は本来「複数標識」ではなく、「集合標識 associative」であるという考え方もある（小島、2012；Corbet, 2000）。たとえば「佐藤さんたち」という場合、たくさんの「佐藤さん」がいるわけではなく、「佐藤さん」とその他の人々の意味になる。が、本稿では「複数を表す接尾辞」として扱う。
- ² 本稿で「-たち」の使用例をテレビ番組から示す場合は、その例の後ろのかっこの中に、（放送局名、「番組名」、放送年月日）のように示すこととする。
- ³ 「-たち」と同様に「-ら」や「-ども」も複数を表すのに用いられるが、本稿では「-たち」のみを扱う。
- ⁴ 中島敦が1942年に発表した小説『光と風と夢』の中で使っている。
- ⁵ 宇野浩二が1919年に発表した小説『蔵の中』で使っている。
- ⁶ 川端康成が1927年～28年にかけて発表した小説『春景色』の中で使っている。
- ⁷ 3冊の本は順に、須賀敦子（1998）『遠い朝の本たち』筑摩書房。川原勝征（2008）『万葉の植物たち』南方新社。三戸サツエ（2012）『サルたちの遺言 宮崎幸島・サルと私の六十五年』祥伝社。
- ⁸ 使用例順に、稲木昭子・堀田知子・沖田知子（2002）『新 えいご・エイゴ・英語学』松柏社。p. 16。吉本ばなな（2002）『キッチン』新潮社。p. 11。吉本ばなな（2002）『大川端奇譚』とかげ』新潮社。p. 12。マーク・ピーターセン（2010）『日本人が誤解する英語』光文社。p. 15。加藤重弘（2014）『日本人も悩む日本語』朝日新聞社。p. 125。
- ⁹ http://www.kahaku.go.jp/event/2008/03red_data/
- ¹⁰ http://www.tnm.jp/modules/r_free_page/index.php?id=202
- ¹¹ <http://www.facebook.com/city.miyakonojo/posts/342554575925953/>

参考文献

- 朝井リョウ(2012). 「水曜日の南階段はきれい」朝井リョウ・石田衣良・萩原浩・越谷オサム・伊坂幸太郎『最後の恋 MEN'S つまり、自分史上最高の恋。』pp. 113-174. 新潮社.
- 荒木博之（1984）. 「日本語にはなぜ複数形がないか」『ユリイカ 詩と詩論』16巻（12）pp. 110-117.
- 池上嘉彦（2007）. 『日本語と日本語論』筑摩書房.
- 井東憲（1941）. 「傳記を蒐める」『書齋と読書』pp. 254-259. 三省堂.
- 乾亮一（1958/1974）. 「国語の表現に及ぼした英語の影響」『復刻文化庁国語シリーズ V 外国語と日本語』文化庁、pp. 7-59. ((1958). 東京：光風書店.)
- NHK アナウンス室（編）（2008）. 『NHK 気になることば一調べてナットク意外な発見！一』. 東京書籍.
- 井上ひさし（2011）. 『日本語教室』新潮社.
- 加藤重弘（2006）. 「日本語の複数形—2つの複数と集合認知—」『国語国文研究』北海道文学国語国文学会（編）130巻、pp. 48-62.
- 見坊豪紀・市川孝・飛田良文・山崎誠・飯間浩明・塩田雄大（2014）. 『三省堂国語辞典』三省堂.
- 小島剛一（2012）. 『再構築した日本語文法』ひつじ書房.
- 三省堂編集書（編）（1985）. 『広辞林 第6版』三省堂
- 新村出（2018）. 『広辞苑』岩波書店.
- 西尾実・岩渕悦太郎・水谷静夫（2009）. 『岩波国語辞典 第7版』岩波書店.
- バイビー、J. 小川芳樹・柴崎礼士郎（監訳）（2019）. 『言語はどのように変化するのか』開拓社（Bybee, J. (2015). *Language change*. Cambridge University Press.)
- 林大（監）尚学図書言語研究所（編）（1986）. 『言泉 国語大辞典』小学館.
- 牧野成一（2007）. 「認知世界の窓としての日本語の複数標示—タチ」久野暉・牧野成一・スーザン・G・ストラウス（編）『言語学の諸相—赤塚紀子教授記念論文集』pp. 121-130. くろしお出版.
- 松村明（2012）. 『大源泉 第2版』小学館.
- Corbet, G. G. (2000). *Number*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Gove, P. B. (Editor in Chief) (1993). *Webster's third new international dictionary of the English language, unabridged*. Springfield, Mass., USA.: Merriam-Webster Inc., Publishers.
- Huddleston, R. and Pullum, G. K. (2002). *Cambridge grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lee, D. (2001). *Cognitive linguistics: An introduction*. Melbourne, Australia: Oxford University Press.
- Murahata, G., Murahata, Y., and Cook, V. (2016). Research questions and methodology of multi-competence. In V. J. Cook & W. Li (Eds.), *The Cambridge handbook of linguistic multi-competence* (pp. 34-64). Cambridge: Cambridge University Press.
- Murahata, Y. and Murahata, G. (2017). Effects of English on the Japanese plural expression with *-tachi*: from a multi-competence perspective. *KASELE Journal* (The Kyushu Academic Society of English Language Education), No. 45, pp. 9-18.
- Reid, W. (1991). *Verb & noun number in English: A functional explanation*. Singapore: Longman.